

アゾレス諸島紀行

95年11月号ナショナルジオグラフィックの中より見開きで撮写された1枚のショッキングな写真が目飛び込んできた。

『これだ、これが私のやりたいことだ』と見た瞬間に決まった。

その写真とは中米ドミニカで映画をスクーバで水中撮影していたカメラマンを背後からナショナルジオグラフィックのスチールカメラマンが撮影したもので、ターゲットは20トンの雄のマッコウクジラであった。（もっとも成熟したものは20m、70トンになる）

それ以降、クジラやイルカの本を数冊買い、マッコウクジラの専門書も買って何回も読み、生態・特徴・分布等を研究し、撮影できる場所を探し求めた。約30社の旅行社へ情報収集のために手紙を出し、勿論ナショナルジオグラフィック日本支部にも写真の場所と受入先の情報を聞いたが、海外発行雑誌のせいか明快な情報は得られなかった。

97年10月TBS『神々の詩』の第1回目放映がドミニカのマッコウクジラであった。撮影は水中プロカメラマンの中村光治さんであった。早速電話して現地の場所と受入先の情報収集をしたが、安全性と費用面で断念せざるを得なかった。

そして99年3月NHK『生き物地球紀行』で再びマッコウクジラが放映された。勿論、早速NHKのディレクターに連絡を取り何度も交渉した結果、撮影された水中カメラマンを紹介され、やっと受入先の情報を秘密厳守の約束で教えて貰った。その人は現地でクジラ、イルカ類のコーディネイトをポルトガル政府から認可された数少ない研究家で、アマチュアはコーディネイトせずプロしか相手にしない人であった。

今までBBC、ABC、NHK等各国の代表的な放送会社、学者、BIGな大学の専門家等、マッコウクジラの水撮影をコーディネイト、ガイドしている。今回は事前に私の作品を3本観て評価して戴いた事と、NHK生き物地球紀行の水撮影カメラマンが彼の親友であったため、何度か交渉して戴いた結果、何とか特別に水撮影の許可があり4年越しの夢がやっと実現できた。また今回の件でNHK生き物地球紀行の水撮影カメラマンと友達になることができました。

そこはクジラの通り道で、特にマッコウクジラの道であった。北大西洋のド真ん中にある9つの島からなる火山群島のアゾレス諸島でポルトガル領である。西回りで直行便がないためロンドン又はパリ経由でリスボンまで15時間、そこで1泊し、翌日リスボンから3時間のフライトでファイアル島へ、そしてフェリーで約1時間のところが最終目的地のピコ島である。昔、ここは捕鯨の島で今は西欧の水エールウォッチングで有名な場所になっている。

ピコ島にはポルトガルで一番高い2,351mのピコ山があり、島の周りの海は海底まで一気に数千mまでドーンと落ち込んでいる。この地形がマッコウクジラの餌である17mのダイオウイカの生息に適しているため、ここが通り道になっていると考えられている。マッコウクジラは約45分間一息で3,000~4,000mの海底まで潜降し、このダイオウイカと戦っている。その潜降のメカニズムは

驚異的な能力で、2トンもある脳油に冷たい海水を取り込んで冷却し凝固した重みで潜降する。そして浮上する時はその脳油に暖かい血液を送り込んで液状化し、その浮力で水面へ戻って来る。

今回の経験で得た結論は『哺乳類は魚類と比べてはるかに賢い』ことだった。人間が観察すると言うよりも、逆に人間が観察されている。スパイホッピング（倒立姿勢）と言う動作で頭を水面に出して人間をじっと観察し、ボートの上から観ている時は4～5mの近距離でも逃げないが、一旦水中に入ると途端に海底深く潜降して次に水面浮上して来るのは約45分後である。水面や水中では大きい音を出すと駄目で、ボートから水中に入る時はそっと静かに入り、水中では常に『Soft in water』。

過去に西オーストラリアのエクスマスで4日間ジンベイザメを水中撮影したが、マッコウクジラとジンベイザメとでは雲泥の差があり水中撮影の難しさを痛感した。

現地6日間の内、海に出れたのは4日間で10時から16時まで6時間、炎天下をゾディアック（船外機付ゴムボート）で大海原を走り回り、やっと撮れた映像がこの作品です。もう一度チャンスがあれば今度は是非スクーバでチャレンジしたいと思っています。

そして私の生涯の夢はモービーディックで有名な『白鯨』の水中映像です。

（モービーディックはアルビノで白くなった成熟した雄のマッコウクジラ：大マッコウ）

以上
浜谷 優